

## 埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況(2013)

埼玉県で2013年に分離され衛生研究所で確認された3類感染症である腸管出血性大腸菌は144株と昨年の86株より増加しました。県内分離144株の内訳を表に示しましたが、最も多く検出された血清型は例年通りO157:H7が92株(63.9%)、次いでO26:H11が38株(26.4%)分離されました。分離された144株のうち46株(31.9%)は患者発生に伴う家族検便や給食従事者に対する定期検便で非発症者から検出されたものでした。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型・毒素型別検出数(2013)

血清型	毒素型	検出数	血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1	1	O103:H2	VT1	1
O157:H7	VT2	30	O111:H -	VT1	2
O157:H7	VT1&2	61	O111:H -	VT1&2	1
O157:H -	VT1&2	2	O121:H19	VT2	2
O26:H11	VT1	38	O145:H -	VT2	3
O8:H -	VT2	1	OUT:H2	VT2	1
O98:H -	VT1	1	計		144

患者の発生状況では、保育園での集団感染事例が2事例発生しました。1事例目は6月下旬から7月初旬にかけて県西部の保育園で発生したO157:H7(VT1&2)集団感染事例であり、園児、家族、職員など対象者の検査を実施したところ、園児及びその家族12名が菌陽性となりました。2事例目は7月下旬から8月中旬にかけて県北部の保育園において発生したO26:H11(VT1)による集団感染事例であり、園児、家族、職員など対象者の検査を実施したところ、園児及びその家族23名が菌陽性となりました。いずれの事例も患者の発症日に集積がみられず、汚染食品等からの単一暴露の可能性は低いことから、保育園内での日常生活において感染が拡大したものと考えられました。不要な拡散を防止するには、平常時からの手洗い等の衛生管理の徹底が重要であると考えられました。

2013年は前年と比較して分離株数が増加しました。上述の集団感染事例の影響もありますが、その他の散発事例や、業態者検便等で健康者から分離される事例も増加していることから、今後ともその動向を注視し、その防止に関する啓発活動を継続する必要があります。

今後とも、原因究明調査等へのご協力をお願いします。